2018 年度
非文字資料研究センター
第 2 回公開研究会

円卓会議―中国・上海都市研究の新動向

共　　催：神奈川大学非文字資料研究センター・上海社会科学院歴史研究所
日　　時：2018 年 11 月 9 日（金）・10 日（土）
場　　所：中国・上海社会科学院
プログラム
【開会挨拶】：小熊 誠（神奈川大学非文字資料研究センター長）
熊 月之（上海社会科学院歴史研究所元所長）

報　　告：

（1）『良友』画報の論文集刊行後の余談
―スポーツと KODAK、そして Shanghai Municipal Council 英文資料について
孫 安石（神奈川大学非文字資料研究センター研究員）
（2）上海文化と香港・華僑
村井 寛志（神奈川大学非文字資料研究センター研究員）
（3）『良友』画報の研究―百貨店
菊池 敏夫（神奈川大学非文字資料研究センター研究員）
（4）都市上海の中の創造社作家たち
中村 みどり（早稲田大学商学学術院准教授）
（5）中華民国期上海の日本人「戯迷」たち
森平 崇文（神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部准教授）
（6）「中国料理」はいつ生まれたのか―人民共和国初期の北京と上海
岩間 一弘（慶應義塾大学文学部教授）
（7）近代日本的华北城市指南与刻板印象
吉澤 誠一郎（東京大学人文社会系研究科教授）
（8）世界音楽史の中の上海
榎本 泰子（中央大学文学部教授）
（9）中国近代都市歴史地図の制作―その現状と課題・上海、大連、ハルビンを例に
木之内 誠（首都大学東京人文社会学部教授）
（10）上海のキリスト教―戦後、そして現在
石川 照子（大妻女子大学比較文化学部教授）
（11）中華民国期の「漫画」と「キャラクター」
城山 拓也（立命館大学言語情報センター外国語嘱託講師）
（12）中国における近代的司法制度の整備と上海の刑事裁判
久保 茉莉子（日本学術振興会特別研究員 PD）
（13）上海の黄浦江と哈爾浜の松花江の内河航行権について
李 美大一（神奈川大学外国語学研究科博士後期課程）

報　　告：

（1）《上海通史》（新修）概述
熊 月之（上海社会科学院歴史研究所研究員）
（2）近代早期上海土地交易实践与制度变迁
叶 斌（上海社会科学院歴史研究所副所長・副研究員）
（3）“跃进”之声 :1959 至 1966 年的上海广播
葛 涛（上海社会科学院歴史研究所研究員）
（4）城区史：当代上海史研究的新路径
张 秀莉（上海社会科学院歴史研究所副研究員）
（5）清末宝山县学事档案研究
高 俊（上海社会科学院歴史研究所研究員）
（6）暗战上海：中国福利基金会与解放战争
徐 锋华（上海社会科学院歴史研究所副研究員）
（7）庙堂与江湖：上海城市人民公社中的国家决策与基层变动
张 生（上海社会科学院歴史研究所副研究員）
（8）工人储蓄与国家建设：新中国成立前后上海工人的金融活动
林 超超（上海社会科学院歴史研究所助理研究員）
（9）开埠早期上海租界地区地价时空演进研究（1845-1900）
牟 振宇（上海社会科学院歴史研究所副研究員）
（10）近代上海城市污染的治理与探讨：以分类营业制度为例
陆 烨（上海社会科学院歴史研究所助理研究員）
（11）万家灯火：近代上海的小家庭（1912-1949）
江 文君（上海社会科学院歴史研究所副研究員）
（12）上海特别市建立初期的政区划定（1927-1928）
蒋 宝麟（上海社会科学院歴史研究所副研究員）
（13）近代女子习医论与女医事业
赵 婧（上海社会科学院歴史研究所助理研究員）
（14）上海家族文献的整理与研究
叶 舟（上海社会科学院歴史研究所副研究員）
（15）《募建黄婆祠捐疏》所见清代上海的黄道婆信仰
王 健（上海社会科学院歴史研究所副研究員）
（16）唐宋时期上海地区市舶机构设置沿革与港口城市的发展
---- 兼及从上海镇到上海县的发展历程
张 晓东（上海社会科学院歴史研究所助理研究員）
（17）开埠后上海城区对乡村的扩展
戴 鞍钢（复旦大学历史系教授）
（18）西本愿寺上海别院与无忧园
陈 祖恩（东华大学日语系教授）
（19）上海史研究的新资料与新路径
王 敏（上海大学历史系教授）
（20）从江户到上海――从德语文献看日、中对外政策的异同
王 维江（复旦大学历史系教授）
（21）上海衣商业及其从业群体述略（1930-1940）
高 红霞（上海师范大学历史系教授）
（22）管理知识：上海图书馆的建立与城市图书馆行业的重塑
沙 青青（上海图书馆信息咨询与研究中心情报部副主任）
（23）法权与治权：近代上海领事法庭与工部局之西人自治
郭 淇斌（复旦大学历史系博士研究生）

参加記：“中国・上海城市研究新動向”国際学術研討会

久保　茉莉子
（日本学術振興会特別研究員 PD）

はじめに

2018 年 11 月 9 ～ 10 日、上海社会科学院歴史研究所・神奈川大学非文字資料研究センターの共催で、“ 中国・上海城市研究新動向 ” 国際学術研討会（「円卓会議―中国・上海都市研究の新動向」）が開かれた。会場は両日ともに上海社会科学院国際創新基地第 5・第 6 会議室で、参加人数は中国側が 25 名、日本側が 15 名であった。本会議は、決して大規模な国際学会とはいえないが、少人数の会議だからこそ、年代も研究分野も様々な日中の研究者が一堂に会し、中国語を公用語としながら、多様な観点から濃密な討論・情報交換を行うことができた。

会議のチラシ

会議の概要

11 月 9 日の午前 9 時 30 分から開会式が行われ、熊月之教授（上海社会科学院歴史研究所）、葉斌教授（同前）、小熊誠教授（神奈川大学外国語学部、非文字資料研究センター）の 3 名が、それぞれ中国や日本における中国都市史研究の概況や、日中間の学術交流の歩み、本会議の意義について述べた。

記念撮影後、午前 10 時から報告が始まった。本会議は、9 日の午前（10 ～ 12 時）・午後（13 時 30 分～ 17 時 45 分）、そして 10 日の午前（9 ～ 11 時）の合計約 8 時間という短い時間の中で 33 名が報告するという、やや過密な日程が組まれていたため、報告時間（1 報告あたり 15 ～ 20 分）やコメント時間（1 名あたり 10 分）を厳守しなければならなかった。時間の制約もあり、基本的には中国語のみで報告・討論が行われたが、必要な場合には日本側の通訳担当者が議論の補助を行った。なお、討論は、中国側参加者の報告に対しては日本側参加者がコメントを、日本側参加者の報告に対しては中国側参加者がコメントをし、その後全体で自由に議論するという形式となっており、日中間の学術交流・情報交換を活発に行うという点で、非常に良いものであった。

以下、日程に沿って、報告者及び報告題目（日本語版）・司会者・コメンテーター（敬称略）を列挙しておく。

会議の模様

11 月 9 日午前、報告 1 （司会：孫安石）。
戴鞍鋼「開港後の上海市街区域の農村への拡張」。
陳祖恩「大谷光瑞と西本願寺上海別院、無憂園―上海日僑社会の生活空間を中心に」。
コメンテーター：岩間一弘、森平崇文。

11 月 9 日午前、報告 2 （司会：王敏）。
吉澤誠一郎「近代日本の都市ガイドブックと中国イメージ」。
木之内誠「中国近現代都市の歴史地図シリーズ制作の経験から」。
コメンテーター：王維江、高紅霞。

11 月 9 日午後、第 1 組、報告 3 （司会：石川照子）。
王敏「本地化と地方化：イギリスの租界華人代表権問題路線の貫徹を中心に（1919–1930）」。
高紅霞「上海の衣服商業及びその従業員群体研究の概観（1930–1940）」。
張秀莉「市街区域史：現代上海史研究の新たな道」。
林超超「労働者の貯蓄と国家建設：新中国成立前後の上海の労働者の金融活動」。
徐鋒華「暗戦上海：中国福利基金会と解放戦争」
コメンテーター：中村みどり、渡辺千尋。

11 月 9 日午後、第 1 組、報告 4 （司会：張秀莉）。
石川照子「上海のキリスト教―戦後、建国後、そして現在」。
中村みどり「都市上海メディアと創造社の作家たち」。
渡辺千尋「国権回復運動下の上海共同租界と在華紡」。
久保茉莉子「中国における近代的司法制度の整備と上海の刑事裁判」。

沙青青「管理知識：上海図書館の設立と図書館業界の再構築」。
コメンテーター：王敏、蔣宝麟。

11月9日午後、第2組、報告3（司会：菊池敏夫）。
王健「黄道婆信仰から見たアヘン戦争以前の上海都市社会」。
葉斌「張之洞と上海の土地財政」。
王維江「江戸から上海へ―ドイツ語文献から見た日中の対外戦略の異同」。
高俊「勧学所と清末地方教育行政体制の創建」。
牟振宇「上海共同租界における土地台帳の調査と土地価格（1903–1933）」。
コメンテーター：吉澤誠一郎、木之内誠。

11月9日午後、第2組、報告4（司会：高俊）。
菊池敏夫「南京路の「再開発」と中国（上海）人の百貨店文化」。
岩間一弘「「中国料理」はいつ生まれたのか―人民共和国初期の北京と上海」。
村井寛志「上海大衆文化と香港・華僑」。
森平崇文「中華民国期上海の日本人「戯迷」たち」。
城山拓也「中国近代美術における漫画の役割―研究紹介、および今後の漫画研究について」。
コメンテーター：戴鞍鋼、江文君。

11月10日午前、第1組（司会：森平崇文）。
孫安石「『良友』画報の論文集刊行後の余談―スポーツとKODAK、そしてShanghai Municipal Council英文資料について」。
李美大一「松花江航行権問題―日本が記録した中国とロシアの争い」。
葛濤「“多元化”から“一元化”への加速的転換―“孤島と淪陥”時期の上海社会の特質」。
張暁東「唐宋時期における上海地区の市舶機構設置の沿革と港湾都市の発展―上海鎮から上海県への発展過程についての言及も併せて」。
陸燁「近代上海における都市の汚染の管理と検討―分類営業制度を例に」。
コメンテーター：村井寛志、高俊。

11月10日午前、第2組（司会：吉澤誠一郎）。
江文君「万家灯火：近代上海の小家庭（1912–1949）」。
蔣宝麟「上海特別市設立初期における行政区域の画定（1927–1928）」。
張生「廟堂と江湖：上海都市人民公社における国家の決定方針と基層の変動」。
郭淇斌「近代上海の領事法廷と工部局の西洋人自治」。
コメンテーター：石川照子、久保茉莉子。

以上からわかるように、11月9日の午前以外は、全て、2か所の会議室で、第1組、第2組の報告・討論が同時に行われた。自身の報告やコメントの都合上、筆者は、9日午後・10日午前のいずれも、第1組に参加した。両会議室は隣接しており、行き来することも可能ではあったのだが、筆者は第1組の会場に居続けた。したがって、第2組がどのような雰囲気であったのか、あまりよくわからない。今思えば、もう少し移動して、全体の様子を把握するべきであった。その点を反省しつつ、自身が参加した第1組に関して言えば、短い時間の中で、たいへん活発に意見交換がなされていた。コメント・討論を経て、筆者は、自身の研究の意義や今後の課題といった大きな問題にあらためて向き合えたと同時に、各地の図書館・文書館の最近の史料公開状況など、かなり専門的な情報についても知ることができ、収穫は大きかった。

なお、日本側参加者の報告の多くが、「研究動向の紹介」ないし「自身の研究の概要」を主な内容としていたのに対し、中国側参加者の報告は、いずれも一次史料を豊富に用いて、かなり詳細な研究発表となっていた。そのため、初めのうちは、本会議の位置づけについて日中間でやや認識にずれがあるように感じられたのだが、近年の研究動向や史料の活用方法について学ぶことは非常に多く、最終的には非常に充実した学術交流の時間を過ごせたので、不満は全くない。

おわりに

11月10日午前の報告終了後、総合討論と閉会式が行われた。残念ながら筆者は参加できなかったのだが、最後まで活発な議論が交わされたと聞いている。日中の研究者間の交流を活性化させるという「円卓会議」の目的は十分に達成されただろう。

歴史学の分野において、日本と中国との学術交流は大いに進展してきた。それは、様々な困難を乗り越えて交流の場をつくる努力を続けてきた方々がいるからにほかならない。今回の国際会議でも、中国側・日本側の多くの方々にたいへんお世話になった。あらためて感謝の意を表したい。

会議の集合写真